



2020

国語

注 意

1. 試験時間は、8:50～9:40の**50分**です。
2. 問題は ㊦ から ㊧ まであります。
3. 解答用紙に、受験番号と氏名を書きなさい。
4. 解答はすべて**解答用紙**に書きなさい。
5. 先生の指示があるまで、問題用紙をあけてはいけません。
6. 問題についての質問はうけつけません。
7. 試験が終わったら、解答用紙を裏返しにしておきなさい。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

中学二年生の山本サトシはある日、「父のようにはなりたくない、高校には進学しない」と言い出し周囲を驚かせた。聞く耳をもたず、かたくなな態度のサトシに動揺した母親は、父の吾郎にサトシと話し説得するように頼み込む。吾郎はサトシと話をするため三河湖へ釣りに出かける。

吾郎には吾郎の考えがあった。サトシの本音を聞いてみたいと思ったのだ。親が子どもの本音を聞く機会などはほとんどない。少し、楽しみでもあった。吾郎がいった。

「俺はな、昔、絵かきになりたかったんだ。知らなかっただろ」

サトシは、驚きの顔を見せた。営業一筋の①「仕事バカ」だと思っていた父の意外な話を聞かされたからだ。

「絵が上手かったのか？」

「ははっ、全然。友だちにマンガの落書きをほめられた程度だ。けどな、中学校を卒業して、みんな、当たり前のように進学するだろ。それが嫌で……。早く働きたかった。早く大人になりたかったんだろなあ。そうだ、俺がやりたかったこと、教えてやろうか」

②サトシは、うなずいた。

「リヤカーにな、画材とペンキを積んで旅に出るんだ。それで、古い看板を見つけては、塗り直してお金を儲ける。そうしながら自分の絵も描いて、日本中を旅する。どうだ、格好いいだろう。これを思いついたのが、中二のとき。名案だと思ったよなあ」

身を乗り出して、サトシはいった。

「でも、高校へは行ったんだろ」

「結局な。でもな、あのとき、みんなの反対を押し切って旅に出たら、今ごろ、どんな自分がいるのかと思うことがある」

「野たれ死に？」

「分らんぞ。画伯と呼ばれているかもしれない」

サトシはクスツと笑った。そして、③真面目な顔でこういった。

「それってさ、後悔こうかいしてるってこと？」

「いや、後悔はしていないな。今の仕事も楽しいからな」

「楽しい？」

「うん、楽しいぞ」

「ウソ。毎日夜中に帰ってきて、飯食って寝るだけの生活だろ。少しも楽しそうじゃない」

「それは、^④見えてないだけさ。俺にだって、お前の楽しいことが分からない。好きな音楽だって、理解できない。でも、お前には楽しいことが一杯あるだろ」

「まあな」

「それと一緒だ。大人は楽しいぞ、めっちゃめっちゃ楽しい。人生を ^b いばらの道みたいにいるけどな、あんなのは大ウソだ」

^⑤（大人は楽しいぞ）それは、進路に悩んでいたサトシにとって、驚きの一言だった。サトシは、確かめるようにいった。

「ウソだろ？」

「本当さあ、子どもも大人も両方とも経験した俺がいうんだから間違いない」

「だって、大人はみんないうぜ。大人は大変だ、たくさん勉強しとかないと、後で困ったことになるって」

「それはなあ……」

「ほら、父さんだって思ってるだろ。高校へ行かない奴は、ろくな大人になれないって」

「そんなことは思っていないさ。とりあえず勉強しとけて大人がいうのは、^⑥半分が愛情で半分が保険だな。親は、自分の子どもが苦労するのを見たくないからな」

「……………」

「でもな、どんな生き方したって苦労はあるし、楽しみはある。いろんな人間がいるんだから、いろんな生き方があってもいいと俺は思うんだがなあ」

吾郎は、そう言ってタバコに火をつけると、おいしそうに息を吐いた。白い煙はサトシの目の前を流れ、ふっと風にとけていく。思いついたように、吾郎がいった。

「なあ、サトシ。ニジマスのいたのはどこだ？」

「あそこだよ。あの岩の向こう側。ちよつとした淵があるだろ」

「よし、釣ってみるか」

吾郎は、そういつて立ち上がった。

「無理だよ。あれだけルアーを引いても反応しなかったんだから」

「じゃあ、やり方を変えよう」

「やり方？」

「ああ、ルアーがだめなら思い切って、エサ釣りにしよう。それもちよつと変わったやり方だ。やり方は色々ある」

(やり方は色々ある……)

サトシは、面白そうだなと思いつながら、吾郎の背中を見つめた。

「あのポイントは遠いから、俺の竿では届かない。だから、リール付きのお前の竿を使おう。フローティングルアーはそのままにして、鉤はりの付いた糸を一メートル結ぶことにしよう。鉤かぎに付けるエサは、俺がさつき釣ったウグイ。どうだ、これで完成だ。ルアーと生き餌えの合体だぞ」

それは、実に面白い仕掛けだった。サトシのやっていたルアーフィッシングとも、吾郎のやっていたエサ釣りとも違ちがうやり方。サトシは、こんなやり方があるのかと感心した。

「でも、邪道じやどうだな」

「へへっ、邪道っていうな。オリジナリティーがあるといえ。主流であるか知らないかなんて、たいした問題じゃない」

「主流であるかないか？」

「みんながやっているか、やってないかだけの問題だろ。そんなこといったら、高校へ行かないのも邪道だっていわれるぞ」

「……………」

「さあ、釣ってみろ」

「俺が？」

「もちろん、お前の竿だからな。さあ」

「う、うん……………」

サトシは竿を持つと、大きな岩の陰かげからポイントをうかがった。エメラルドグリーンエメラルドグリーンの淵には、さっきのニジマスが X 浮かんで

いる。(いる、まだいるよ)

振り返るサトシに、吾郎は満面の笑みを返した。

(よしっ！)

サトシは半身に構えると、ポイントに向けて竿を振った。

ヒュン、

風を切る音がしてルアーが放たれた。ルアーとエサのウグイは、柔やわらかく放物線えがを描いた後、ポチャンと音を立てて青い水面に落ちた。ルアーの作った水の輪が広がり、エサのウグイが泳ぎ出す。

(いい感じだな)と、サトシは思った。

カリッ、カリッ、カリッ。ゆつくりとリールを巻く。

ルアーが、ニジマスの鼻先を横切る。ニジマスは、一瞬いっしゆん、頭を振って関心を示したが、ルアーには近寄らない。

が、次の瞬間だった。

ヒラヒラと不自然な動きをするウグイが目の前を横切ると、ニジマスは反射的に飛び付いた。そして、パシヤリと反転し、一気に走り出したのだった。

「きたっ！」

リールが Y 音を立て、水面に突き刺ささる糸が白く光った。必死に竿を立てるサトシ。ニジマスは水中を右へ左へと走り回った。しかし、上顎うわあごに Z 刺ささった鉤は、決して外れることはなかった。

数分後、水辺には興奮覚めやらぬ顔の二人が立っていた。足元に横たわるのは、もちろんサトシが釣り上げたニジマスだった。

「やったな、サトシ」

「うん」

自慢じまんげというより、信じられないという顔だった。たった一投で、今まで釣ったことのない魚、それもこんな大物をしとめたのだから、無理もないことだろう。サトシがいった。

「こんなやり方も、あつたんだな」

「ああ、やり方なんて腐るほどある。要は、どんなやり方を選ぶかさ」

吾郎の言葉に、⑦ サトシが小さくうなずいた。

(阿部夏丸『父のようにはなりたくない』による)

問一 波線部 a～c の語句の意味を、次の中からそれぞれ選んで、記号で答えなさい。

a 名案

- ア 完璧な計画
イ 希望に満ちた考え
ウ 驚くべき発想
エ すばらしい思いつき
オ あさはかな提案

b いばらの道

- ア 苦難の多い道筋
イ 選べない選択
ウ 華やかな進路
エ 起伏の激しい坂道
オ 歩きづらい路面

c 邪道

- ア 悪意にみちた方法
イ 裏をかいたずるいやり方
ウ その人なりの個性的な事柄ことばら
エ 本来から外れているあり方
オ 人をあざむく卑怯ひきような手段

問二 空欄XくZにあてはまる語句を、次の中からそれぞれ選んで、記号で答えなさい。

- ア ゆったりと イ きびきびと ウ だらだらと エ ギリギリと
オ ギスギスと カ がっちりと キ きらきらと ク らんらんと

問三 傍線部①「仕事バカ」とありますが、父親に対するサトシのとらえ方として、この内容を具体的に表現した部分を二十五字以内で抜き出して答えなさい。

問四 傍線部②「サトシは、うなずいた」とありますが、このときのサトシの心境を説明したものとして、もっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 父も自分と同じように早く大人になったがっていたことを知り、その歩んできた人生に興味を持ち始めている。
イ 仕事ばかりの父を嫌悪けんおしていたが、意外な話を聞かされて少し父の考えに対して好奇心こうきしんを持ち始めている。
ウ わざわざ遠くまで釣りに来てまで自分を説得しようとする父の思惑おもわくに、少しぐらいはつきあおうと思っている。
エ 自分から父に話しかけることも思いつかないため、父が話すのを聞き流しながら釣りをしようと考えている。
オ 説得しようとする父の真剣しんけんな話しぶりに胸を打たれ、自分もちゃんと真剣に父と向き合おうと決意を固めている。

問五 傍線部③「真面目な顔で」とありますが、ここに誰だれのどのような気持ちが読み取れるか、四十字以内で答えなさい。

問六 傍線部④「見えてない」とありますが、(i)誰が(ii)何を「見えてない」のか答えなさい。

問七 傍線部⑤「(大人は楽しいぞ)」とあるように、本文には「」以外に()で記された箇所がいくつかあります。これらはどのように使い分けられていますか。その違いを自分の言葉で説明しなさい。

問八 傍線部⑥「半分は愛情で半分が保険」とありますが、ここに父親のどのような気持ちが読み取れますか。もっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 勉強をしておけば子どもが将来大きく失敗することがないと考え、その子を見続ける自らの安心のためにも言っているということ。
- イ 勉強をする子どもの方が親として愛しやすいくらいということもあるが、教育を受けさせる役割を果たすため言っているということ。
- ウ 子どものことは愛しているが、老後の面倒を見てもらえることを期待して裕福になりそうな可能性を追求してしまうということ。
- エ 子どものうちにしっかり勉強しないとろくな大人にならないという、身をもって経験したことを事実として伝えていくということ。
- オ 子どもの考えを受けいれる気持ちもあるが、他方、親の意向も聞き入れてほしい気持ちも捨てきれずに口出ししてしまうということ。

問九 傍線部⑦「サトシが小さくうなずいた」とありますが、本文の場面がサトシの心境にどのような変化を及ぼしたのか、自分の言葉で説明しなさい。

問十 本文の特徴を説明したものととして、不適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 大人には子どもの見えない豊かな世界があることを、父の余裕のある態度で暗示している。
- イ 父と子どもの両方の内面を明らかにしながら、話にふくらみをもたせる語り方をしている。
- ウ 子どもの返事の言葉数の少なさが、父に対する複雑な感情をうかがわせている。
- エ 魚を釣る場面では、擬音語や擬態語を効果的に用いてイメージしやすいように描いている。
- オ 悩んでいる出来事に対して、一見無関係な釣りという出来事が効果的に重ね合わせられている。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

さて、そこで昨今の「甘やかされ日本語」の状況を考えていただきたいのですが、まずこれが典型的なかたちであらわれているのが小学校の現場でしょう。「最近の子供たちは、どうもうまく自己表現ができない」「作文ができない」「一語文しか語れない」「メシ・フロ・ネルのお父さん」と同じように！……と、あちこちの先生方から悲鳴が聞こえてきています。「自己表現」や「作文」ができないなどというのはまだ良いほうで、とくにこの「一語文」問題は深刻なようですね。

教室でとつぜん生徒が「①先生、テスト」とやる。先生には彼の言わんとすることが分からないので、Aどぎまぎしながら「え、今日テストやる予定だったっけ？」「あれ、採点したやつを返すんだっけ？」「それとも、今度のテストのことを説明するんだったかな？」などと、いろいろ聞き返すことになるでしょう。

ところが②生徒は要領をえない感じで、だまっている。やがて、ふと思いついた先生が「あ、そうそう、きみ、きのう休んでいてテスト返してなかったんだよね」と言うと、ようやく返事がかえってくる。「そうです。……これでは、どっちが生徒か先生か、ちつとも分かりませんね。

かつて私たちは、先生の前などでは、きちんとした言葉づかいをするようにと躰けられたものでしたが、最近では、「ママ、ジュース」なんて言うのと同様、先生にも「一語文」や「タメ口」（身内での言葉づかい）で話すのが普通です。ある意味では、先生という存在が近しいものになっているとも考えられるのですが、③喜んではばかりはいられません。なんと大学生にさえ、一語文やタメ口しか使えない人々が出現しはじめています。

そんな話をしてくれた某大学の知人に、「そりゃきみに対して、その学生さんが親近感をもっているからじゃないの」と問いただしてもみただけですが、答はノー。彼によれば、こうした傾向は、親しさの問題などではさらさらなく、子供たちに他者認識ができなくなり、公私のけじめがつかなくなっていることのあらわれだと言っています。

そう言われて、通勤途中の車内風景などを観察してみれば、まさしくそのとおり。悪ふざけをする小中学生、はた目も気にせず化粧にはげむ「コギヤル」「オオギヤル」、ヘッドホンからシャカシャカ音をふりまく「ヤンキー」、ケータイをかける大学生、だれもが傍若無人のふるまいをし、注意する他人には「あんだよー、ジジイ」とタメ口（以上）をきく始末。

ま、ようするに彼らは、私空間に閉じこもり、仲間内の言葉に終始しているわけですね。

(中略)

この原因をとらえるためには、コミュニケーション論で使われる「冗長度」という考え方をひきあいに出すといいのですが、皆さんはご存知でしょうか。一般に、身内と話す時には言葉の冗長度が低く、他人と話す時には高くなると言われます。そう、身内の話では「以心伝心」できる部分が多いので、あまり言葉はいりませんが、他人との話では、少し冗長に言葉を連ねなければ理解してもらえないということなんですね。

ですから、身内や仲間内ばかりで冗長度の低い話をしていると、表現力はちつともきたえられず、^④甘やかされた物言いになってしまいません。これがまさしく、あの一語文やタメ口しか話せない若者たちをつくり出す原因となるのでしよう。

(中略)

「マジかよ」「ええ、マジー?」「マジっすか」などの汎用語を頻発し、ノリのよさだけで仲良しゴッコをしている「ボキヤ貧」(語彙が貧困)の若者たち……「グローバル社会」だとか「IT社会」だとか威勢のいいかけ声ばかりが響くなか、そんなこととは裏腹に、彼らの言葉は仲間内に閉ざされて、すっかり甘やかされてしまっているように思われます。

いや、それ以上に、こうした状態は、かえってIT社会が生み出したウオークマンやケータイのせいでは、いっそう深刻なものとなっているのではないのでしょうか。電車のなかでヘッドホンをつけてケータイ・メールにはげむ若者たちを見ていると、私にはそれが、かなり危機的な状況であるように思われてなりません。

ヘッドホンをつけた人々は、外界を遮断して繭のなかに閉じこもります。周囲でおこる現実にはかかわらず、外部と言葉をかわすチャンスもない。他人をシャットアウトして、私空間にひたるわけですね。

もつとも、ケータイ・メールの方はちがうだろう、という反論がすぐさま聞こえてきそうですが、これにもまた注意が必要となるのです。たしかにメールのやりとりをしている人々は、ちょっと見には言語活動のさなかにあるわけで、これがどうして言語的な甘やかしに結びつくのか不思議に思われるかもしれません。ところが、彼らはほとんどの場合、「今、どうしてる?」「電車に乗ったとこ」なんて文面を送りあい、ごくごく仲間内でB紋切型の会話をかわしているばかりなのです。

そもそもケータイそのものが、個人から個人への直接的な連絡を行なうツールであるために、私的空間からは出られません。固定電話であれば、受話器をとるのが相手の親だったり、子供だったり、時に恋敵であったりするようなこともあるので、それなりの言葉づかいが必要となりますが、ケータイであれば「オレオレ。アレどうなった?」なんて切り出しで十分なわけですね。言葉はひたすら甘やかされるば

かりです。

そのうえ昨今では、コンビニ、スーパー、自動販売機はんばいといったような、他人と言葉をかかさなくてもいい便利な場所がやたらにふえて、人々はますます無口になりはじめています。たとえ活発な言葉がとびかっているように思われても、よく聞いてみると、そこには「接客敬語」や「コンビニ敬語」と呼ばれるものの機械的なくり返しがあるばかり。それも売り子さんの声が一方的に響いているばかりなのです。

(中略)

グローバル化の波は、その名のとおり私たちを地球上のあらゆる人々に結びつけます。風土も文化もちがう時空に生まれ、慣習も感性も異なる仲間たちと、私たちは理解し合わなければなりません。だとすれば、当然ながら私たちは、「以心伝心」や「仲間内の言葉」にたよらず、こうした異なる個人間に、異なるグループ間に、そして異なる世代間に、これからはしつかりした言語によるコミュニケーションを確立していかなければならないはずです。

そのためには、なによりもまず、^⑤これまでの聞き手の察知力いぜんに依存した日本語に喝いせをいれ、それをたたき直してゆく必要があるでしょう。

(加賀野井秀一『日本語を叱る!』による)

(注1) 傍若無人…まわりの人に配慮はいりよせず、好き勝手にふるまうこと。

(注2) 冗長度…伝えたいことを中心以外の、余分に長くなる部分の度合い。

(注3) 汎用語…広くあちこちに使われる言葉。

(注4) 繭コケシ…カイコが作るマユのこと。閉じこもることのたとえ。

(注5) 喝いせをいれる…大声で叱ること。

問一 文中の波線部A・Bの意味として適当なものを次の中からそれぞれ選んで、記号で答えなさい。

A どぎまぎ

- ア 理解しようとして緊張きんちやうすること。
イ ミスをかくそうとあわてること。
ウ 予想外のことにうるたえること。
エ あわてて言い間違まちがいをすること。
オ 態度が悪いため腹をたてること。

B 紋切型

- ア 仲間内で決めているあいさつの形。
イ 決まりきって型どおりであるもの。
ウ 断片的で仲間だけにわかるもの。
エ 気分を伝えるだけのむなし言葉。
オ それぞれの個性が表れているもの。

問二 傍線部①「先生、テスト」とありますが、先生に理解してもらうには、どのように言えばよかったですでしょうか。「先生、私は」を始め、その続きを三十文字以内で答えなさい。

問三 傍線部②「生徒は要領をえない感じで、だまっている」とありますが、「だまっている」のはなぜですか。生徒の気持ちとして不適、なものの一つ、記号で答えなさい。

ア 先生が見当違いのことを言うので、とまどっているから。

イ 伝わっていないようだが、どう言えばよいかわからないから。

ウ 伝わるはずなのに、先生がわからないのは納得がいかないから。

エ 変な言い方をしてしまい、先生に悪かったと思っているから。

オ わからないとは思わないので、わかるのを待っているから。

問四 傍線部③「喜んでばかりはいられません」とありますが、それはなぜですか。その理由となる部分を文中から四十字前後でさがし、解答欄にあわせる形で最初と最後の五字を答えなさい。

問五 傍線部④「甘やかされた物言いになってしまいます」とありますが、そうなる理由を六十字以内で説明しなさい。

問六 二重傍線部「たとえ」が直接かかっている言葉を、次の中から記号で答えなさい。

ア 活発な

イ 言葉

ウ とびかた

エ ように

オ 思われても

問七 傍線部⑤「これまでの聞き手の察知力に依存した日本語に喝をいれ、それをたたき直してゆく必要がある」とありますが、筆者はなぜそうすることが必要だと考えていますか。八十字以内で答えなさい。

問八

次のア～オについて、本文の内容に合っているものにはAを、違っているものにはBを答えなさい。

- ア IT社会になったおかげで、関係が薄くうすなりがちな若者もコミュニケーション力が上がった。
イ ケータイやメールでコミュニケーションが広がったように見えるが、実際は狭くせまなっている。
ウ 機器や生活の便利さでしゃべる機会は少なくなり、人に伝える力はますます失われてきている。
エ 日本語が甘やかされてきたのは、他の国に比べて子供が愛情深く育てられてきているからである。
オ タメ口をきいても疑問に思わないのは、社会に平等の意識が広く浸透しんとうしているからである。

三

次の①～⑤の傍線部のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① 友人からのチュウコクをていねいに聞く。
② 広い野原をサンポする。
③ 事故を起こした会社がシャザイする。
④ ひまわりが一面に植えられたハナゾノだ。
⑤ 難しい実験をココロみる。

[問題はここまです。]

